中等教育現場に有意な資格試験のあり方に関する研究

―実用英語技能検定試験と TOEIC，その他資格試験との比較，および今後における課題―

大阪府／大阪大学大学院言語文化研究科博士課程在籍　山西 敏博
申請時：三重県／日生学園第一高等学校　教諭

概要 本論は以下の８点に対して分析を行い，提言をしていくことを研究目的とする。

1. 英検と TOEIC，TOEIC Bridge，工業英検における中等教育現場に対する有益性
2. 英検の優位性：英検とセンター試験との関連性，TOEIC との比較
3. 英検の TOEIC，TOEIC Bridge と比較しての課題
4. 英検の中等教育現場への取り組み方
5. 中等教育学校現場の教員が欲している資料
6. 保護者に対して有益性を訴える資料
7. その他に対する意見・提言
8. 総括：課題と提言

これらに関して，外部試験として定評のある資格英語試験である英検と TOEIC（Bridge）を，大学入試センター試験英語科目との獲得得点などの相関性と比較検討しながら，今後の指標としていくことをめざす。

その結果，英検は中等教育現場において，語彙や学習内容項目他の点で TOEIC や TOEIC Bridge，その他の試験よりも優位性を示すことがわかった。

1 研究の目的

実用英語技能検定試験（英検）は，その設立以来50年近くにわたり学校現場に定着し，数々の級を設立して，中高校生は言うに及ばず，小学生や大学生，一般社会人にも英語学力の伸長度を測る指針として，これまでに数多くの受験生を抱えてきた，我が国では最大級の英語検定試験である。一方，それに対して，近年企業からの要請として「使える英語」，すなわちコミュニケーション能力を重視した新たな英語検定試験の柱として TOEIC（Test Of English for International Communication）および TOEIC Bridge が脚光を浴び，その受験熱は高まりを見せる傾向にある。

そのような中で，本論では以下の８点に対して分析を行い，提言をしていくことを目的とする。

1. 英検と TOEIC，TOEIC Bridge，工業英検における中等教育現場に対する有益性
2. 英検の優位性：英検とセンター試験との関連性，TOEIC との比較
3. 英検の TOEIC，TOEIC Bridge と比較しての課題
4. 英検の中等教育現場への取り組み方
5. 中等教育学校現場の教員が欲している資料
6. 保護者に対して有益性を訴える資料
7. その他に対する意見・提言
8. 総括：課題と提言

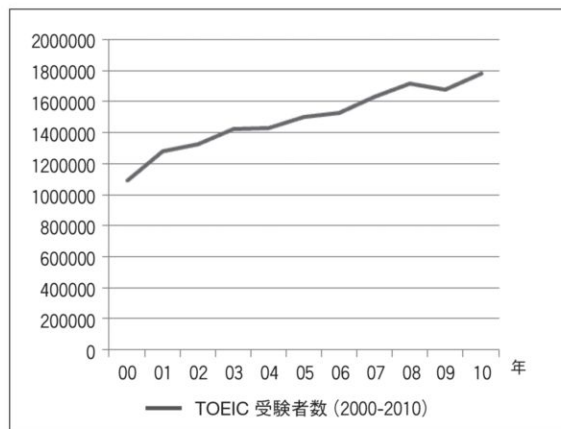
これらに関して，外部試験として定評のある２つの英語試験である，「英検」と「TOEIC（Bridge)」を中心として，大学入試センター試験英語科目との獲得得点などの相関性と比較検討しながら，今後の指標としていきたい。

2 英検とTOEIC, TOEIC Bridge, 工業英検における中等教育現場に対する有益性

今日，英語における資格試験は英検をはじめとして数多くのものが現存する。ここでは，TOEIC，TOEIC Bridge，工業英検を取り上げる。

2.1 TOEIC

TOEIC は過去20年以上にわたり，英語コミュニケーション能力を評価するテストとして利用されてきている試験である。TOEIC テストは，合否ではなく10点から990点までのスコアで評価されている。また，このテストは，世界約120か国で実施されているが，その大半は日本と韓国で活用されている。さらに和文英訳，英文和訳などの技術ではなく，身近な内容からビジネスまで幅広くどれだけ英語でコミュニケーションできるかということを測ることを目的としている（国際ビジネスコミュニケーション協会, 2011f）。

TOEIC の受験者数の推移は以下の図１のようになっている。

▶ 図 1：TOEIC 受験者数の推移（2000-2010）（国際ビジネスコミュニケーション協会, 2011a）

このように，ここ11年間で，TOEIC の受験者数は年々上昇の一途をたどっている。これは企業による英語コミュニケーションの能力を測ることが大いに推奨されてきているので，その要請はどんどんと大きくなっているということが言える。

問題構成は，Listening セクションが100問で45分，Reading セクションが同様に100問で75分，計200問を120分で解く形式になっている。

2.2 TOEIC Bridge

TOEIC テストの受験者層が数多く広がりを見せたとともに，TOEIC よりも「易しくて」，「日常的で身近な」，「時間の短い」初級学習者向けのテストを求める声が高まってきた（国際ビジネスコミュニケーション協会, 2011i）。そこで，TOEIC プログラムを開発したテスト開発公共機関 Educational Testing Service（ETS）は，関連会社である The Chauncey Group International（CGI）を設立し，TOEIC の前段階として基礎的な英語コミュニケーション能力を評価する世界の共通テストとなる TOEIC Bridge（以下 Bridge）を開発した。このテストは TOEIC の特徴を備えつつ，初・中級レベルの英語能力測定に照準を合わせている。評価結果は合格・不合格ではなく，Listening（25分・50問），Reading（35分・50問）がそれぞれ90点満点，Total Score が180点満点になっており，５分野３段階の Sub Score で評価するという基準となっている（国際ビジネスコミュニケーション協会, 2011i）。

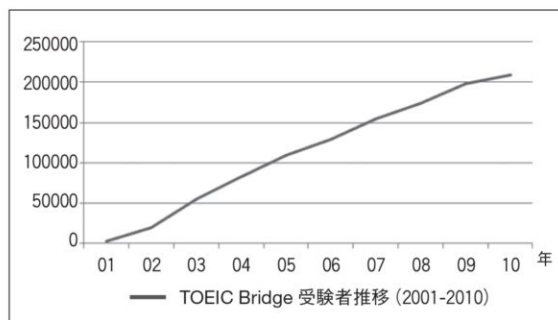
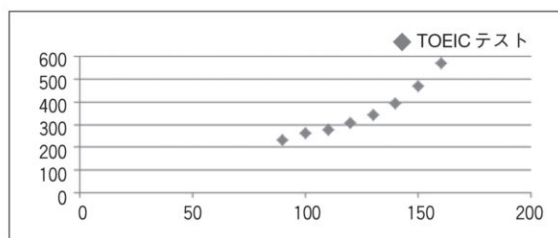
Bridge においては，あくまでも TOEIC 試験を易しめに設定したものである。受験者数の推移や TOEIC とのスコアの対比は図２，図３のとおりになっている。

▶ 図 2：TOEIC Bridge 受験者数推移（2001-2010）（国際ビジネスコミュニケーション協会, 2011k）

▶ 図 3：TOEIC と TOEIC Bridge とのスコア比較（国際ビジネスコミュニケーション協会, 2011 l）

図２のように受験者はここ10年で2,500人から20.9万人と８倍以上に上昇している。大学に進学した後や企業が求めている資格試験の英語数値は TOEIC のスコアを要求することが多いために，高等学校なども それに追随していると言うことができる。

また，図３のように TOEIC と Bridge との点数を比較したものも提示されている。縦軸は TOEIC スコア（990点満点）で，横軸が Bridge のスコア（180

点満点）となっている。ただし，注意事項として，2000年11月から2005年9月までの15,569名を対象に，Bridge のスコアからそれぞれに対応する TOEIC スコアを「予測」したものであり，「サンプルが変わると，結果の数値が変わる」とある。よって，データとしては信憑性に欠けるものとなっている。

Bridge の問題形式は TOEFL-PBT（Test of English as a Foreign Language：Paper-Based Test）と非常に類似した形になっている。

TOEFL にない形は Part 1の写真を見てのリスニング問題と Part 5 の表を見ての読み取りである。確かに実社会において必要な技能としては，外国に行って案内板や時刻表などを見ながらそこに記されている注意書きを読むとか，空港などで出発時刻や乗り場が急きょ変更になったときなどのアナウンスを聞くといった場面が想定されることから，TOEIC 形式が好まれるのかもしれない（これは後述の第 3 章の内容と関連性を持つ）。しかしながら，現段階における学校現場においてはあくまでも「読み・書き」が中心の英語教育となっており，加えて出題される語彙数の問題がある。Bridge は使用単語に制限を設けてはいない一方で，公立中学校現場での学習語彙数は2003年度 4 月からは900語程度（うち必須単語は100語）（金谷, 2002）であり，2008年度からは1,200語に増大されてはいるものの，おのずと Bridge は語彙数から言っても，中学生にはまだ向かない試験であると思われる。さらに文法・語法問題の出題形式においても，その出題される文脈や内容，そして選択されるべき語や語彙についても，一見すると日本人になじみのある出題のされ方とは意を異にしているようにも見受けられる。これは「工業英検」（2.4参照）と同様に言えることである。

2.3　TOEIC と TOEIC Bridge との比較

ここでは TOEIC と TOEIC Bridge との比較を取り上げる（表 1）。

TOEIC の受験に関しては，TOEIC Bridge 150点以上を取得した者で，かつ英語能力に関してさらに詳しく情報を得たい者に受験を勧めている（国際ビジネスコミュニケーション協会, 2011m)。なぜなら，それだけ語彙や語法レベルについて TOEIC と Bridge とでは差があるからである。加えて，Bridge は基礎的な英語能力を測定する指標として設計されていることから，学習初期段階のレベルチェックとしての活用や，TOEIC テストを受験しながらも，

■表 1：TOEIC と TOEIC Bridge との比較

	TOEIC Bridge	TOEIC テスト
テストコンセプト	英語によるコミュニケーション能力を測定する世界共通のテスト	
受験対象者	・日常的なシーンで，コミュニケーション英語能力を身につけたい方。 ・基礎から英語学習を始めたい方。	・身近なシーンからビジネスまで幅広い場面でのコミュニケーション英語能力を身につけたい方。 ・就職活動やキャリアアップなど社会で自分の英語力をアピールしたい方。
測定範囲	初級から中級レベル	初級英語学習者からネイティブスピーカー（英語を母国語とする人）に近いレベルまで
出題内容	日常的で身近な内容	身近な内容からビジネスまで幅広く
テスト形式	マークシートによる一斉客観テスト	
評価スケール	リスニングスコア 10～90点（2点刻み） リーディングスコア 10～90点（2点刻み） トータルスコア20～180点 サブ・スコア（5分野3段階評価）	リスニングスコア 5～495点（5点刻み） リーディングスコア 5～495点（5点刻み） トータルスコア10～990点

	TOEIC Bridge	TOEIC テスト
テスト構成	リスニング 50問 （25分間） リーディング 50問 （35分間） トータル 100問 （60分間）	リスニング 100問 （45分間） リーディング 100問 （75分間） トータル 200問 （120分間）
公開テストの結果	Official Score Certificate（公式認定証）	

まだ十分に能力を発揮できていないと感じる人々の動機づけとしての活用を促している。しかしながら，Bridge の受験対象者としては「日常的なシーンで，コミュニケーション英語能力を身につけたい方。基礎から英語学習を始めたい方」という表記のみがあり，測定範囲も「初級から中級レベル」という非常に大雑把な記され方で，どういった年齢や学齢の者が対象かが明確にはされていない。加えて語彙レベルもどのようなものが出題されるのかもはっきりしていない。

2.4　工業英検

工業英検とは，我が国の工業英語の重要性を広く普及・啓発し，その実力を客観的に正しく評価することを目的に1981年より実施している文部科学省後援の検定試験であり，また，社団法人全国工業高等学校長協会，国立高等専門学校協会ならびに財団法人専修学校教育振興会など14団体の後援を得て実施している試験である（日本工業英語協会, 2011b)。審査基準は表２のとおりである。

この試験は，「４級」においてはⅠ「和訳」，Ⅲ「英文完成」という形式をとってはいるが，出題されている文には中学生での学習領域をはるかに越えている語彙が出題されている。

同様に，「３級」レベルとなると，さほど難しくはない単語を空所補充として入れる段階においても，文脈自体に日常的ななじみがなく，かつ専門的な場合には，易しい内容であるはずの文であっても文の背景が難しく，かつ複雑であったりすることから全体としては難しい文に見えてしまい，高校生を含む受験生が選択肢を選ぶ際には困難を期するであろうと思われる。

これらで出題されている語彙レベルは，それぞれは英検で言えば「準１級（大学中級相当)」のレベルに相当し，また，「２級（高校卒業相当)」に該当するものもあることから，通常の英語単位数が普通科高校よりも少ない工業高校においては，これらの語彙力を有して工業英検の問題にあたるには至難の業であると思われる。加えて，前述したように，たとえ単語の意味がわかっていたとしても，文脈の背景にある「工業系の知識の内容」が周知のものであるかないかによって，その設問自体が解きやすいかそうでないかに分かれてしまい，結果としてそれらから英語能力を測る際に信頼性や妥当性があるかどうかといった方向にまで広がっていってしまうことが懸念される。

また，昨今の JABEE（Japan Accreditation Board for Engineering Education：日本技術者教育認定制度）認定の要件の１つとして，多くの高専（高等専門学院）では「TOEIC」における一定点数を学生が取得するように義務づけている（JABEE, 2012)。このことから，近年は高専生およびその学校における英語指導者の関心も「工業英検」から「TOEIC」に移行しており，そういった点からも工業英検の需要度はさほど高くはないように思われる。

2.5　英検

英検は1963年創設以来過去50年近くもの長きにわたり学校現場に根づいてきた検定試験であり，１級（大学上級程度：約10,000語～15,000語レベル）・２級（高校卒業程度：約5,100語レベル）と３級（中学卒業程度：約2,100語レベル）までの創設期を経て，66年には４級（中学中級程度：約1,300語レベル)，87年には準１級（大学中級程度：約7,500語レベル)，５級（中学初級程度：約600語レベル)，そして94年には準２級（高校中級程度：約3,600語レベル）とその幅を着実に広げ，中学・高等学校の現場において英語学習の指針となる役割を果たしてきた（日本英語検定協会, 2011b)。合格基準は一次試験においては１級・準１級は70％前後，２～５級は

■表 2：工業英検審査基準（工業英語協会，2011b）

級	区分	技能	内容
4級	程度		工業英語の基礎知識を有しているレベル
	領域	読む	・科学・技術に関する簡単な文を読むことができる。
			・実験，生産工程に関する簡単な指示，注意事項を読むことができる。
			・実験室，生産現場の簡単な掲示，看板を読むことができる。
		書く	・科学技術の分野の基礎的な単語を書くことができる。
			・科学技術の分野の簡単な文を書くことができる。
3級	程度		工業英語の応用知識を有しているレベル
	領域	読む	・科学・技術に関する基本的な文章を読むことができる。
			・簡単な取扱説明書を読むことができる。
			・実験，生産工程に関する指示文，注意事項を読むことができる。
			・実験室，生産現場の掲示文，看板を読むことができる。
		書く	・科学技術の分野の基本的な単語に習熟し，簡単な説明文，操作指示文などを書くことができる。
2級	程度		工業英語全般の知識を有しているレベル
	領域	読む	・技術的な文章（取扱説明書，仕様書，論文等）のスタイルの違いをほぼ理解し，読むことができる。
			・専門雑誌，業界誌の内容をほぼ正確に理解できる。
			・自分の専門分野の論文をほぼ正確に読むことができる。
		書く	・技術論文のメカニクス（句読点，記号，略語等）をほぼ正しく使った文章を書くことができる。
			・科学技術の専門用語に習熟しており，スタイルをほぼ良く考慮した文章を書くことができる。
1級	程度		工業英語の専門家としての実務能力を有しているレベルで，実務上，工業英語を指導できる
	領域	読む	・技術的文章（取扱説明書，仕様書，論文，規格等）のスタイルの違いを正確に理解し，読むことができる。
			・専門とする分野に関して，高度な論文，記事を正確に読むことができる。
		書く	・読み手に応じた工業英語のレトリック（文章表現法），メカニクスを活用して，商品としてのテクニカルドキュメントが作成できる。
			・他人が書いた英文をテクニカルライティングの面から添削できる。
		聴く	・ネイティブの技術者やテクニカルライターとドキュメント制作上の問題点について討議できる。

60％前後，二次次試験に当たる面接はいずれの級も60％前後となっている。

合格通知も発行されており，これには分野別得点などのデータと正解が添付されている。その中で，受験者はどの分野が得意，または不得意であったか，また，受験者全体の中で自分がどの位置にいるのかを確認することができ，単に合格を知らせる通知としてだけではなく，英語学習に役立つ資料を提供している（日本英語検定協会, 2011a）。

また，現在，英検には「Can-do リスト」というものが存在している。これは英検では，2003年５月から約３年の歳月をかけ，延べ20,000人を超える１級から５級の合格者（合格直後）に対し，数回にわたる大規模アンケート調査を実施し，その結果をまとめた指標である。個々に示された各項目は，調査に回答した合格者が自己評価して「自分はこの項目ができる自信がある」と考えたものを，統計的な手法を使って分析したものである（日本英語検定協会, 2011d）。

このリストには，「英検合格者の実際の英語使用に対する自信の度合い」という副題をつけ，「何かができるようになった人は，テストで何点取れる」というように，例えば，「社会性の高い幅広い分野の文章を理解することができ」たり（Reading),「社会性の高い話題についてまとまりのある文章を書くことができる」（Writing）者が，「英検１級」を取得することができる，といった指標になるのである。

このように英検は受験する級がきめ細かく分かれており，さらには「Can-do リスト」も用意されていることから，生徒の学習伸長度に応じてそれぞれの級を採用しやすいという点が学校現場における採用のしやすさになっているものと思われる。前述のように英検は５級が中学１年修了相当，４級は中学２年修了相当，３級が中学修了相当と，英語の初学

■表 3：英検審査基準（日本英語検定協会，2011c）

級・レベル		
1 級	程度	広く社会生活に必要な英語を十分に理解し，自分の意思を表現できる。
レベル： 大学上級程度 約10,000語～ 15,000語 レベル	領域 内容	[聞く・話す] 口頭で表現できる。 （演説，討議，通訳，電話折衝などができ，放送などの英語を十分に理解し，その大意を伝達できる。） [読む] 高度の文章を読むことができる。 （新聞，雑誌，一般文献などを読むことができる。） [書く] 高度の内容をもつ達意の文章を書くことができる。 （会議などの要旨が記録でき，自分の意思を十分に書き表すことができる。）
準 1 級	程度	日常生活や社会生活に必要な英語を理解し，特に口頭で表現できる。
レベル： 大学中級程度 約7,500語 レベル	領域 内容	[聞く・話す] 一般的な事柄について会話ができ，さらに専門的な事柄についても一応の対応ができる。 （自分に関する説明や一応の通訳ができ，放送などの大意の理解，電話での応対ができる。） [読む] 一般的な事柄についての文章を読むことができ，専門的な文章についてもその大意を理解し，必要な内容を読み取ることができる。 （やや高度の文章を理解し，新聞，百科事典などを読んで，必要な情報を的確にとらえることができる。） [書く] 一般的な事柄についての文章を書くことができ，専門的な事柄についても要点を書くことができる。 （会議などの概要の記録や，自分の意思を書き表すことができる。）
2 級	程度	日常生活や職場に必要な英語を理解し，特に口頭で表現できる。
レベル： 高校卒業程度 約5,100語 レベル	領域 内容	[聞く・話す] 一般的な事柄について会話ができる。 （電話で簡単な用務が達せられ，簡単な説明，報告，通訳などができる。） [読む] 一般的な事柄についての文章を読むことができる。 （新聞記事，手紙，説明書などを読むことができる。） [書く] 一般的な事柄についての文章を書くことができる。 （手紙や簡単な説明文などを書くことができる。）
準 2 級	程度	日常生活に必要な平易な英語を理解し，特に口頭で表現できる。
レベル： 高校中級程度 約3,600語 レベル	領域 内容	[聞く・話す] 日常的な事柄についての会話ができる。 （電話で簡単な用務が達せられ，簡単な説明，伝言，通訳などができる。） [読む] 日常的な事柄についての文章を読むことができる。 （新聞の報道記事，手紙，ごく簡単なパンフレットなどが読める。） [書く] 日常的な事柄についての文章を書くことができる。 （簡単な手紙や説明文などを書くことができる。）
3 級	程度	基本的な英語を理解し，特に口頭で表現できる。
レベル： 中学卒業程度 約2,100語 レベル	領域 内容	[聞く・話す] 簡単な日常会話ができる。 （挨拶や応対ができ，人の紹介，商品の売買，道案内や伝言などができる。） [読む] 簡単な文章を読むことができる。 （簡単な手紙，看板，掲示，商品の説明書などを読むことができる。） [書く] 簡単な文章を書くことができる。 （簡単な手紙，日記，掲示文などを書くことができる。）
4 級	程度	基礎的な英語を理解し，平易な英語を聞くこと，話すことができる。
レベル： 中学中級程度 約1,300語 レベル	領域 内容	[聞く・話す] 決まった語，句，文で会話ができる。 （簡単な挨拶や紹介ができる。） [読む] 平易な文を読むことができる。 （辞書などが使え，平易な手紙が読め，短い文章の要点を読み取ることができる。） [書く] 平易な文章を書くことができる。 （句読点や大文字が正しく使え，クリスマスカードや年賀状などを書くことができる。）

5 級	程度	初歩的な英語を理解し，簡単な英語を聞くこと，話すことができる。
レベル： 中学初級程度 約600語 レベル	領域 内容	[聞く・話す] 初歩的な語句で意思疎通ができる。 （簡単な文の聞き分け，日常慣用の挨拶，必要最小限の意思伝達ができ，絵などを見て大体のことが言える。） [読む] 初歩的な文を読むことができる。 （アルファベットを正しく見分け，簡単な文のあらましが分かり，その内容にあった読み方ができる。） [書く] 初歩的な英語で，簡単な事柄を書くことができる。 （簡単な単語や文を聞いて書くことができる。）

■表 4：英検各級・分野別 まとめ表現（日本英語検定協会，2011c）

	読む	聞く	話す	書く
1級	社会性の高い幅広い分野の文章を理解することができる。	社会性の高い幅広い内容を理解することができる。	社会性の高い幅広い話題についてやりとりをすることができる。	社会性の高い話題についてまとまりのある文章を書くことができる。
準1級	社会性の高い分野の文章を理解することができる。	社会性の高い内容を理解することができる。	社会性の高い話題について，説明したり，自分の意見を述べたりすることができる。	日常生活の話題や社会性のある話題についてまとまりのある文章を書くことができる。
2級	まとまりのある説明文を理解したり，実用的な文章から必要な情報を得ることができる。	日常生活での情報・説明を聞きとったり，まとまりのある内容を理解することができる。	日常生活での出来事について説明したり，用件を伝えたりすることができる。	日常生活での話題についてある程度まとまりのある文章を書くことができる。
準2級	簡単な説明文を理解したり，図や表から情報を得ることができる。	日常生活での話題や簡単な説明・指示を理解することができる。	日常生活で簡単な用を足したり，興味・関心のあることについて自分の考えを述べることができる。	興味・関心のあることについて簡単な文章を書くことができる。
3級	簡単な物語や身近なことに関する文章を理解することができる。	ゆっくり話されれば，身近なことに関する話や指示を理解することができる。	身近なことについて簡単なやりとりをしたり，自分のことについて述べることができる。	自分のことについて簡単な文章を書くことができる。
4級	簡単な文章や表示・掲示を理解することができる。	簡単な文や指示を理解することができる。	簡単な文を使って話したり，質問をすることができる。	簡単な文やメモを書くことができる。
5級	アルファベットや符号がわかり，初歩的な語句や文を理解することができる。	初歩的な語句や定型表現を理解することができる。	初歩的な語句や定型表現を使うことができる。	アルファベット・符号や初歩的な単語を書くことができる。

者に当たる中学生，および早期英語教育を受けている小学生や幼稚園児たちも受験がしやすい制度になっている。

とりわけ，英検受験合格者の最年少は公文教材で学習していた3歳児が英検5級を取得したという実例（1997, 2003年度）がある。同様に2011年度には3歳児が4級に合格した実績もある（日本英語検定協会, 2011a）。97年次に5級を取得したその子供は4歳になった時点で英検4級を取得し，その後6歳時に3級をも取得した（くもん出版, 1997）。同様に，帰国子女なども英語習得（学習）の目安として幼少期から数多く英検を受験するなど，英検の伝統と実績は不動のものとなっている。中学校現場においてはもちろんのこと，5級から3級までの受験者の6割以上は中学生である（図4）。3級になると高校生も3割近くを占めてはいるが，それでも出題

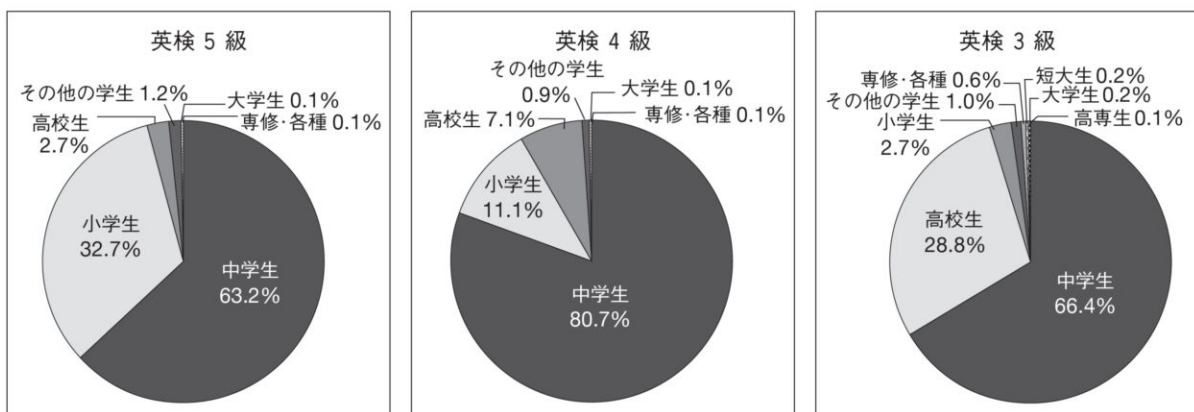
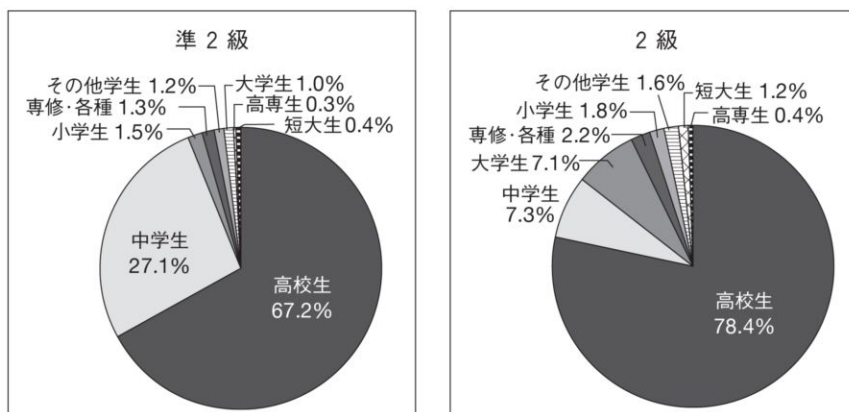
■表 5：英検 2011 年度第 1 回検定　学生別受験状況（日本英語検定協会 , 2011f）

学校	1 級	準 1 級	2 級	準 2 級	3 級	4 級	5 級	合計
	志願者	志願者	志願者	志願者	志願者	志願者	志願者	志願者
	合格者	合格者	合格者	合格者	合格者	合格者	合格者	合格者
小学生	55	577	1,676	2,346	5,205	13,042	23,631	46,532
	6	125	709	1,197	2,924	7,888	19,666	32,515
中学生	405	1,546	6,895	40,796	128,110	94,597	45,635	317,984
	64	418	1,657	14,099	70,547	71,283	39,508	197,576
高校生	801	6,311	73,678	101,056	55,593	8,330	1,962	247,731
	126	773	16,804	34,253	23,297	4,008	1,374	80,635
高専生	6	39	363	536	234	32	18	1,228
	1	4	68	209	118	12	12	424
短大生	7	123	1,165	544	320	6	5	2,170
	0	10	313	206	130	5	2	666
大学生	1,087	4,462	6,677	1,533	419	62	37	14,277
	112	745	2,441	678	204	47	36	4,263
専修・各種	38	397	2,026	1,909	1,142	141	80	5,733
	1	46	453	696	560	74	37	1,867
その他学生	291	875	1,543	1,761	1,788	1,056	880	8,194
	41	172	479	608	839	672	703	3,514
合計	2,690	14,330	94,023	150,481	192,811	117,266	72,248	643,849
	351	2,293	22,924	51,946	98,619	83,989	61,338	321,460

レベルが「中学修了程度」という目安から，中学校での学習進度状況を鑑みながら学校現場でも中学教師の薦めを受けての受験が多いと思われる。

さらに，準 2 級，2 級となると，図 5 のような結果になる。

準 2 級は「高校中級程度」であるものの中学生の受験率は 4 分の 1 を超えてはいるが，どちらも高校生が過半数を占めている。中でも 2 級の「高校修了程度」においては大学生 7.1％と中学生の各 7.3％から大きくその数を引き離し，高校生は 4 分の 3 以上を占めている。このことから，高校生には英検準 2 級・2 級の受験が定着していると言うことができる。

一方，教師自身が英語能力試験を過去に受けた事例として，表 6 のデータがある。

▶図 4：英検 5・4・3 級（中学校内容履修相当）における，中学生受験者の割合（日本英語検定協会 , 2011f）

▶ 図 5：英検準 2 級・ 2 級（高等学校内容履修相当）における，高校生受験者の割合（日本英語検定協会 , 2011f）

■ 表 6：全国中学英語教員の英語能力試験受験有無調査（石田他 , 2002）

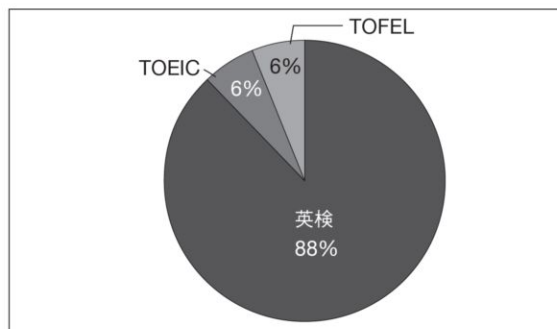
1.	英語能力試験を過去に受けたことがあるか。（N = 1278）				
	ある　61.3%　　ない　34.1%　　無回答　4.6%				
2.	英語能力試験受験結果				
	英検	総計 88%	1 級 10%	準 1 級 27%	2 級 51%
	TOEIC	6%	900 以上 1%	810 以上 2%	730 以上 3%
	TOEFL	6%	600 以上 2%	580 以上 1%	550 以上 3%

▶ 図 6：全国現職中学英語教員アンケート調査結果

表6，および図6に示されているように，中等教育現場で務める英語教師の中で英語能力試験を過去に受けた経験のある者はおよそ60%，そして図6のようにその中で約90%（データ集計分中の53.9%）は英検を受験してきた経験があることがわかる。一方，TOEIC および TOEFL はアンケートに回答してきた全教師中の3.7%にしかすぎない。このことからも中等教育現場教師の英検に対する認知度の高さや，自分自身が学生時代に受験してきた流れ，そしてその効果が高かったことから，次代を担う者にもその効果を味わわせてあげたいという意識，さらには高校受験へ向けての中学段階での習得状況を図る上での道標としての活用など英検がもたらすさまざまな効果の所以であると思われる。

加えて英検の伝統と実績から，最近では一般の人たちの受験もその数を増している。全国的に見ても一次試験受験者数に関しては，2003年度から2011年度において，3 級は8,256名から19,703名，準 2 級は12,330名から16,137名となっている（日本英語検定協会, 2003a, 2011f）。このように早期英語学習者や帰国子女など日本国内での学校において英語教育を受けてはいない者，また社会人の生涯学習の場においても，英検は英語能力を測る目安となっており，学校現場はもとより修学時前（Pre-School）の段階においても大変効果的であろうと思われる。

以上のことから，少なくとも中等教育，とりわけ前期中等教育に当たる中学校段階および後期中等教育における高等学校段階において，英検は TOEIC Bridge や TOEFL，および工業英検よりも受験率の高さや信憑性において，圧倒的な優位性を誇っているものと思われる。

3　英検の優位性：英検とセンター試験との関連性，TOEIC との比較

外国語学習においての4技能，すなわち，Speaking，Listening，Reading，Writing に関して，英検はこれらの能力を測る上で大変有用な試験であると考えられる。「審査基準」では，まず測定領域として Speaking，Listening がすべての級で最初の項目に位置づけられ，3 級以上には「特に口頭で表現できる」という条文から，二次試験の面接では，

実用面におけるSpeakingを中心とした英語によるコミュニケーション能力の審査に重点が置かれている（日本英語検定協会, 2003a）。したがって，Speakingについては二次試験の面接で最大10分程度，Listeningは一次試験で30問，Readingについてはこれも一次の文法・語法，および読解試験で測ることができる。それらがコンピュータによって数値としてはじき出され，受験者は自分がどの分野が強かったか，または弱かったなどが判定できて大変有用であると思われる。ただ，Writingの測定に関しては，TOEFLに付随する「TWE（Test of Written English）」や「GTEC（Global Test of English Communication）テスト（Benesse）」が行っているWriting Testの方が真のWriting能力を測っていると思われる（これについては後述の第4章でもふれる）。

従来はWriting能力を測る出題方式と言えば，「文整序」や「語群空所補充」，さらには「和文英訳」などが主流であった。

しかし，英検では筆記試験を行っていない（マーク式回答方式のみ）ことから，「和文英訳」以外の２方式のみが採用されている。一方，上記の２テストは実際にテーマに即して論旨展開を含めた英文による記述（小論文方式）を導入し，それをネイティブが直接添削をして採点をする。加えてGTECにおいては，その解答用紙を赤字で添削して受験者に返却するといった方法を採用している。

TWEやGTECの両試験と英検では受験者の絶対数が大きく異なるために，英検ではこのような出題，採点方式の導入は極めて困難かと思われるが，現実的にこのような方法でWriting能力が測定されていることは事実として提示する。

コミュニケーション能力を測る上で一次試験の筆記（マークシート方式）では測ることのできない二次の面接試験を実施しているといった点も英検の強みであろうと思われる。英語をはじめとする言語はコミュニケーションの道具である観点からも，面接試験の導入は大変意義があると考えられる。

一方，英検の出題形式は中等教育の学校現場においては大変有意義な形となっている。これまでに英検とセンター試験の出題形式の類似性について現場で指導を行ってきている高等学校教諭から記された論文がある（藤原, 1997; 山西, 2000）。それによると，藤原は問題構成や出題傾向から見た共通点と相違点における研究で，リスニング能力の測定がセンター試験には導入されていない点（2002年当時）や設問数と出題比率がそれぞれの試験において多少異なること以外においては，双方の試験における類似性は極めて高いことを実証している（山西, 2003a, 2010a）。

■表７：「英検２級」と「センター試験（2002年度）」との出題形式の比較

	英検2級	大学入試センター試験
第１問	文法・語法	発音・アクセント
第２問	語群整序	文法・語法，会話表現，語群整序
第３問	長文中語補充（論説）	長文中語補充，文整序
第４問	長文読解（論説・評論）	図表などビジュアル読解（論説）
第５問	—	ビジュアル会話読解
第６問	—	長文読解（小説）
Listening	あり（30点／75点）	なし（０点／200点）
全問題中のListeningの比率	40%	０%

表７から英検２級の第１・２問は2002年当時の大学入試センター試験の第２問に相当し，英検２級の第３問はセンター試験の第３問に，英検２級の第４問もセンター試験の第４問に相当すると考えられる。

また，近年のセンター試験においても，表８のように同様の傾向が見られる。

表８のように，英検２級の第１・２問は2010年度の大学入試センター試験の第２問に相当し，英検２級の第３問はセンター試験の第３・５問に，英検２級の第４問もセンター試験の第６問に相当すると考えられる。その結果，藤原（1997）は「英検はセンター試験の受験対策として非常に有効である」と説いている。その結果を参考にしながら山西（2000）は，「ある一定の英検級（準２級・２級）を取得した生徒は，同様にセンター試験英語科目でも高得点を取ることができる」という仮説を立て，それを実証した。その結果，英検取得級とセンター試験における英語科目との間には相関関係が見られ，準２級取得者は，データから読み取ることのできるセンター試験英語科目平均点は２年間平均およそ140点，２級取得者のセンター試験英語科目平均点はおよそ

■表 8:「英検 2 級」と「センター試験(2010年度)」との出題形式の比較

	英検2級	大学入試センター試験
第 1 問	文法・語法	発音・アクセント
第 2 問	語群整序	文法・語法,会話表現,語群整序
第 3 問	長文中語補充(論説)	未知語・表現推測,討論要約,長文中語補充
第 4 問	長文読解(論説・評論)	図表などビジュアル読解(論説・図表)
第 5 問	—	ビジュアル会話・論説読解
第 6 問	—	長文読解(評論・論説)
Listening	あり(30点/75点)	あり(50点/250点)
全問題中のListeningの比率	40%	20%

160点という結果が出た。このことから,とりわけ2級や準1級を取得していた生徒は,センター試験においても高得点を取ることができたということが立証された。

さらに早い学年に英検級が取得できた者(中学2年次に英検準2級,中学3年次に英検2級を取得)はセンター試験でもかなりの高得点を挙げることができるという分析結果も出た。これは早期に英語を習得することが,将来的には自分の可能性を大いに広げる道標ともなることが実証されたことになった。

加えてそれらに相まって,藤井(1997)は勤務校の生徒に「卒業条件」の1つとして,全員に「英検2級」の取得を義務づけた。その結果,英検2級取得者の難関大学合格率との相関関係が高くなったことを立証している。

他方,TOEICにおいては,4技能の測定についてはどうであろうか。前述の出題形式から,現在SpeakingやWritingに関しては,ListeningやSpeakingとは別に「Speaking and Writing Tests(略称SWテスト)」と称して「話す・書く」の技術を測定している(国際ビジネスコミュニケーション協会, 2012)。また,Writingについては,以前は英検と同様に「語群整序」の形式が出題されていたが,2006年以降の改訂でその形式がなくなってしまった。代わりに,「写真描写」や「Eメール作成」,そして「意見記述」など,「書くこと」としての内容は多岐にわたっている。また,Listening,Readingについても従来どおりの方法で測定ができている。さらにBridgeにおいては,Readingセクションには語群整序はなく,Part 4の文中に適切な1語を入れるという形式にとどまっている。以上のことから総合的に判断して,以前は前述のようなSWテストのようなものはなく,「書くこと」が少なかったのが,現在のTOEICはこのように改良されてきていることから,以前よりも格段の進歩が出てきていることがわかる。

反面,中等教育現場にあたる中学・高校生が,すべての分野に対して精通して記すことができるかどうかや,語彙力を含めてこれらの課題に対して適切な論旨展開をしながら記述をしていくことが可能かどうかという点には疑問が残る。そして,その検証として,2010年度現在で受験者総数は2006年度より創設されて以来,過去最多の8,500人にはなってはいるものの,そのうち学生の受験者総数は1,503人(17.7%),さらにそのうちの中学・高校生の総数は70人(4.7%)(国際ビジネスコミュニケーション協会, 2012)という結果が出ており,中等教育現場においてはまだまだ普及しているとまでは言い難い。したがって,この4技能を測るTOEIC試験が中等教育現場に浸透していくまでには,まだまだ時間がかかるであろうことが推察されることから,現段階においては英検の方が中等教育現場内においては,その存在価値としては優位であろうと思われる。

4 英検のTOEIC, TOEIC Bridgeと比較しての課題

これまでにも第2・3章の中で記してきたように,英検についても今後改善を要する必要があろうと思われる点も散見される。それは以下の2点である。

(1) Skimming, Scanningを用いての情報収集という「現代的な内容読解」に乏しい。

(2) 真の「書く」能力(Writing Competence)の測定に乏しい。

(1)については,TOEIC試験におけるPart 1の写真を見てのリスニング問題とPart 5の表を見ての読み取りと比較しての実感である。社会において必要な技能としては,単純に長文を読んでその内容把握についての設問に答えるというよりは,外国に

行って案内板や時刻表などを見ながらそこに記されている注意書きを読むとか，空港などで出発時刻や乗り場が急きょ変更になったときなどのアナウンスを聞くといった場面が数多く想定される。日常生活においても文献資料を読むよりはパンフレットや広告などの情報を素早く読み取って，自分の生活に役立てていくことが多いであろう。そのような観点から最近の現状では英検から TOEIC 形式にシフトしていこうという傾向が好まれ始めているのかもしれない。加えてそのような能力を持った社会人が必要にもなってきていることから，企業が TOEIC を積極的に採用する傾向が見受けられる。

■ 表 9：企業が求める英語力（文部科学省 , 2004）

企業名	TOEIC 目標得点
富士通	600 以上（必須） 730 以上—海外赴任・国際業務担当 860 以上—MBA 取得資格・技術者留学
伊藤忠商事	662—新入社員平均獲得得点（2003） 700 未満—通信教育による TOEIC 教材での履修 700 以上—半年間の大学附属 ESL にて全社員が研修 4 年後に取る目標得点
ACCENTURE	730—新入社員平均獲得得点（2003） 特別な研修制度なし

■ 表 10：Proficiency Scale —TOEIC スコアとコミュニケーション能力レベルとの相関—（国際ビジネスコミュニケーション協会, 2011d）

新入社員	455 ― 655
技術部門	515 ― 725
営業部門	525 ― 745
海外部門（駐在員）	655 ― 850

■ 表 11：過去 5 年間の新入社員平均スコア（国際ビジネスコミュニケーション協会, 2011b）

年	点数
2006	466
2007	460
2008	456
2009	466
2010	485

以上の表から，表 9 が示すように，企業が「使える英語力」を要求し出すと，将来的に社会に人材を送り出す側としての学校現場も，表11のようにそれに追随すべく，TOEIC またはそれに準じる Bridge を採用しようという流れになると思われる。そしてその結果として，表10のように，新入社員や，技術・営業・海外駐在部門で必要な TOEIC の点数というものも課されるようになってくる。しかしながら，前述したようにあくまでも現段階で学校現場においては「読み・書き」が中心の英語教育となっており，加えて出題される語彙数の問題から，使用単語に制限を設けていない Bridge において，中学校現場での学習語彙数は2003年度 4 月からは900語程度（うち必須単語は100語）（金谷, 2002）が踏襲されていることから，おのずと Bridge は中学生にはまだ向かない試験であると思われる。

では，高等学校現場においては Bridge の位置づけはどうであろうか。設問の形式は高校においての一般のテスト出題形式とはやはり一線を画してはいるが，TOEIC を意識する学校では採用を前向きに検討する所もあるかもしれない。むしろ，「TOEIC を採用する学校は，レベルが高い学校」といった風潮もあることは事実であろうと思われる。2002年度で学校単位で TOEIC を採用した著名な学校は，神奈川県においては栄光学園中高等学校と聖光学院であった。両校の卒業生の学力を測る指針の 1 つとして，主要大学への合格者数をその目安とする（表12）。

■ 表 12：栄光学園と聖光学院の主要大学合格者数（2003）

	大学名					
高等学校名	東京	一橋	東京工業	国立大医学部	早稲田	慶應義塾
栄光学園	77	11	8	23	92	104
聖光学院	37	14	11	7 （判明分のみ）	114	144

両校とも採用の理由としては「国際的なコミュニケーション能力の修得」を挙げている（国際ビジネスコミュニケーション協会, 2003a, 2003d）。

他方，2002年度から「Super English Language High School（略称 SELHi）」という制度が，文部科学省より導入された。この SELHi 事業とは文科省が推進する「英語が使える日本人」の育成のための

行動計画」の一環として具体的な行動計画の中で取り上げられた高校レベルにおける取り組みであり，英語教育で顕著な活動を行っている高校を４年間で100校指定し，３年間の研究プロジェクトを任せる事業となっている。学習指導要領にとらわれない独自のカリキュラムによって，英語読解力を向上させ，受験英語はもとより，より効果的な実践英語の研究を進め，さらにインターネットによる豊富な英語情報を他教科に活用する能力をさらに高めたり，海外校や大学との交流なども より一層充実させることができる事業である。

SELHi に指定された１校である福岡女学院高校は，「読む・書く」に重点が置かれた言語教育」からの脱皮を図り，「聞く・話す」を中心とした授業によるコミュニケーション能力を育みながら総合的な英語能力を高める」という趣旨で Bridge を採用している（国際ビジネスコミュニケーション協会, 2003a）。埼玉県栄東高校は「総合的な英語力育成の指針としての活用」を決め，「テストが１時間と授業内での対応に最適」であり，「大学や企業から高い評価を受けている TOEIC につながるテスト」であることが採用の理由であると述べている（国際ビジネスコミュニケーション協会, 2003b）。1995年頃には鹿児島ラ・サール高校では同じ英検でも「ケンブリッジ英検」を採用している。すなわち，前述したように「企業が TOEIC を積極的に採用」といった流れや「国際的なコミュニケーション能力の修得」から，学校としてもこれらに見合った生徒の育成をめざすと考えられる。ただ，この制度はやはりあくまでもレベルが高い進学校に限定されながら指定を受けているのが実情である。Bridge の受験者総数のうち高校生は22.6%，団体特別受験制度（IP）による高校生の受験者数は30.6%を占めているが，この国際ビジネスコミュニケーション協会自体も Bridge の受験資格は「TOEIC では450点程度が取れる者」に薦めているほど，TOEIC 本試験自体がレベルが高いということを示している（国際ビジネスコミュニケーション協会, 2003a）。

この Bridge 受験資格とされる「TOEIC 450点」が取れるという目安は，国立高等専門学校（高専）30校（受験者総数3,756名），および高等学校（高校生）49校（同5,569名）が2002年度に受験したデータによると，受験者平均は高専生で342点，高校生368点（国際ビジネスコミュニケーション協会, 2003c），さらに，国立高等専門学校（高専）55校（受験者総数20,643名），および高等学校（高校生）138校（同11,765名）が2010年度に受験したデータによると，受験者平均は高専生で349点，高校生410点（国際ビジネスコミュニケーション協会, 2011c）となっている。したがって，450点を目標得点とするには2002年度よりは得点の伸びが出てはきているものの，いまだかなりの隔たりが見られる。一方，多くの高専は５年卒業時（大学２年次に相当）に取得をめざさせている点数が「400点」, また, 同専攻科修了時（大学４年次に相当）で「430点」であり，中には同じ専攻科修了時であっても「400点」を条件している学校すらある（国際ビジネスコミュニケーション協会, 2002）。

また，国立山口大学経済学部の卒業生（大学４年次）に取得を目標とさせている点数が「400点」であることから鑑みても，「TOEIC 450点」を取らなければならないという目安は，高校生が取得する目標値としては相当高い位置にあると推測される。

一方，Bridge の出題方式と，センター試験の出題形式とで比較すると表13，表14のようになる。

このように，Bridge の出題形式はセンター試験のそれと比較すると，Bridge の第１－３問はセンターの Listening に匹敵し，Bridge の第４問はセンターの第２問，Bridge の第５問はセンターの第５問に該当する形になっている。だが，実際の問題を見比べてみると，大幅な違いがあることから，セン

■ 表13：TOEIC Bridge とセンター試験の出題形式との比較（2004）（山西, 2004）

TOEIC Bridge（60分）	大学入試センター試験（80分）
第１－３問：Listening	第１問：発音・アクセント
第４問：文法・語彙	第２問：文法・語法，会話表現，語群整序
第５問：図表などビジュアル読解（日常生活）	第３問：長文中語補充，文整序
第４問：―	第４問：図表などビジュアル読解（論説）
第５問：―	第５問：ビジュアル会話読解
第６問：―	第６問：長文読解（小説）
Listening：あり（50点／100点）	Listening：なし（０点／200点）
全問題中の Listening の比率	
50%	０%

■表14：TOEIC Bridge とセンター試験の出題形式との比較（2010）（山西，2010b）

TOEIC Bridge（60分）	大学入試センター試験（80分）
第1－3問：Listening	第1問：発音・アクセント
第4問：文法・語彙	第2問：文法・語法，会話表現，語群整序
第5問：図表などビジュアル読解（日常生活）	第3問：未知語・表現推測，討論要約，長文中語補充，文整序
第6問：—	第4問：図表などビジュアル読解（論説・図表）
	第5問：ビジュアル会話・論説読解
	第6問：長文読解（評論・論説）
Listening：あり（50点／100点）	Listening：あり（50点／250点）
全問題中の Listening の比率	
50%	20%

ター試験対策を敷いている普通の学校レベルでは対応しにくいのが実情である。あえて言及するならば「英検2級」（高等学校卒業程度）を取得している生徒数が多い学校ほど英検を中心に英語学力の向上を図りながら，「2級の次の英語学習指針」として「英検準1級」（大学2年修了程度）または「TOEIC」を併行して薦める傾向があると思われる。

その背景としては「準1級」の出題語彙数が7,500語レベルになっているためにそれほど難しい単語を知らなくとも英語での日常生活レベルでは支障はなく，むしろ周知の単語語彙数のレベルからでもSkimming，Scanning などの幅広い技能を持って英文に接することができる能力の方を重視するべきではないかと思われる。さらには「英検1級」（大学修了程度）となると語彙数は10,000語レベル以上にまでなるので，かなり専門的で難解な語彙となることから敬遠されがちになってしまうのではないかと推察される。反面，英検1級を取得している者のTOEIC の獲得平均スコアが2002年度では794点となっていた一方（国際ビジネスコミュニケーション協会, 2002）で，2010年には945点に大幅上昇をしている（国際ビジネスコミュニケーション協会, 2011d）ことから，TOEIC で900点以上を取得した人であれば英検1級はほぼ合格しており，逆に言えば，英検で1級を取得している者は，TOEIC では900点を確実に越えるということも言える。

もう1つ Bridge の採用に際して考えられる点としては，この試験形態と TOEFL の出題傾向が類似しているといったことも挙げられる。近年全国的に有名な進学校からは日本の大学にはあえて進学せずに米国・英国などの大学に直接進学する傾向も出てきている。TOEFL は外国の大学を受験する際にはその関門となるが，それを受験するということは直接日本の大学入学試験の出題形式にとらわれる必要はなくなるのであり，それは加えて「国際的コミュニケーション能力の修得や伸長度を測る」試験の受験へとつながっていくことになる。さらにそのような観点から見ると，TOEFL への準備がそのままTOEIC の準備へとつながっていくのであり，それには TOEIC 自体が企業や日常生活のレベルでの用いる英語としては少々難しいために，その布石として Bridge を受験しようという動きにもつながってくるのではないかと思われる。しかし，このTOEFL も「英検2級取得」相当の得点は約670点満点 中350 － 400点（Paper Based Test： 略 称 PBT）と言われていることから，「英検2級」を取得した上でさらに勉学を重ねて米国大学入学の最低レベルに相当する500点台（＝準1級に相当）をめざしていかなければならないので，場合によってはBridge よりもはるかにレベルの高い試験であると言うことができる。

以上の点から，大まかに言って「英検2級取得者」（＝ TOEIC 450点取得者に相当か）は次の学習指針として TOEIC に進むであろうと思われる。逆に言えば，「英検2級取得」までは無理して TOEIC に進む必要はないのだが，その善後策として「英検準2級」か「Bridge」の選択になろうかと思われる。しかし，全体としては大学受験の準備のための資格試験といった観点に焦点を合わせると，出題形式や出題内容の類似点から「英検」にその優位性が上がり，あえてそれでも「コミュニケーション能力の伸長度測定」といった形を取りたい場合（＝大学受験での模擬試験的要素を度外視した場合）には「Bridge」を採用するのではないかと思われる。

Writing については，前述したように TOEIC は「SW テスト」を2006年度より導入している。加えて，Writing Competence を測定したい場合には「TWE」や「GTEC（Benesse）」が行っているWriting Test の方が前者のテストより以前にできて

いることから実績が認められると思われる。

前述したように上記の２テストは実際にテーマに即して論旨展開を含めた英文による記述（小論文方式）を導入し，それをネイティブが直接添削をして採点をする手法を取っており，加えて GTEC においてはそれを赤字で添削して受験者に返却するといった方法を採用していることから，ネイティブの視点にかなった「論理的な構成」と「文法的に正しい表現方法」の２点が測定されることになろう。反面 TOEIC の SW テストと同様に TWE が要求する内容は大学生レベルのそれに準じてくることもあるが，GTEC の Writing Test に関しては高校生レベルに合わせた内容を提示していることから高校現場における採用率は高い。また，Reading や Listening 試験においては，TOEIC との獲得得点の相関関係も極めて高いといった実証データも出ている（東京大学, 1999）。

これらの現象から Bridge が幅を利かせ始める以前には GTEC の採用が数多くあった。Bridge 自体の相関関係を示した論文や，Bridge と TW テストとの得点に関する相関についての論証はいまだされてはいないが，それでも確実に「TOEIC につなげるための高校生用の試験」という位置づけは果たしているように思われる。大学入学試験においても，以前から東京大学などで Paragraph Writing に関する問題が出題されていた（図７）。

> 次の命題について，自分の意見を一つ決定付けた上で，論旨展開がなされるように英語20語で記しなさい。
> （前文省略）
> The Japanese government (should / should not) encourage us to make human clones like Doreen, the sheep clone, because -----.

▶ 図 7:「Paragraph Writing 試験」例題 1（東京大学，2000）

北海道大学においては，「日本の夫は，他の先進国同様に家庭内の子育てに積極的に関与すべきである」といった命題を，先進国の子育てに関するグラフを提示しながら，３つの段落に分けて論旨の展開をなしながら英文で記すといった出題がなされた（図８）。

> Now look at the graph (略) on the next page and write your own paragraph about the amount of housework Japanese men do. Your paragraph should be 100-130 words long. Use the following pattern as a guide:
> First sentence — To introduce the topic, write a sentence describing the amount of housework that Japanese men do. In this sentence it is not necessary to give detailed information.
> Middle sentences — Support your first sentence by a) using information from the graph to compare Japanese men with men from the other two countries, and b) giving two reasons why you think these differences might exist.
> Last sentence — Summarize the main idea of your paragraph. Include your opinion if you want to.

▶ 図 8:「Paragraph Writing 試験」例題 2（北海道大学, 2002）

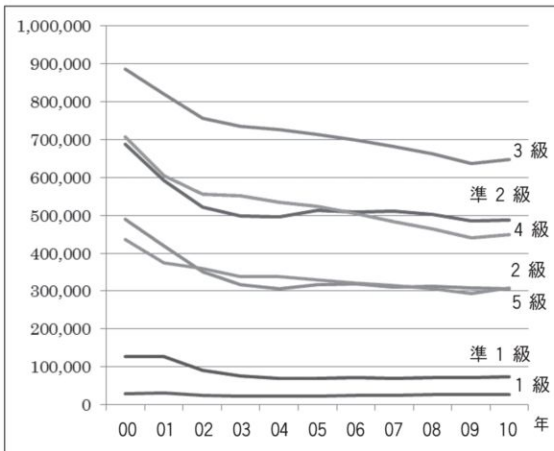
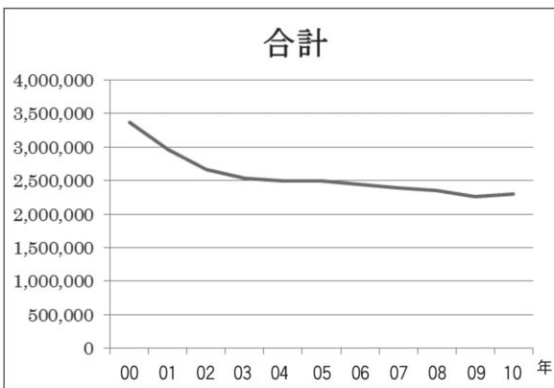
このように，大学入試問題においても従来の「語群整序」や「和文英訳」といった「英作文」から，真の「書く」力を測る，Paragraph Writing の「英語による作文（小論文）」形式へと移行していることが見られる。この Writing Test の出題については，TOEIC を運営する国際ビジネスコミュニケーション協会が先行している。このことから，英検においても今後のより一層の検討と発展性が待たれるところである。

5　英検の中等教育現場への取り組み方

これまでに記してきた内容をもとに，「英検がいかに中等教育学校現場での英語教育方法に準じているか，加えて高等（専門）学校・（短期）大学入学試験への準備として，出題形式の類似性や双方の獲得得点の相関性を総合的に見ながら，いかにその役割を大きく果たしているか」といった点を中心に訴えていけば，必ずやその効果は生まれるものと確信する。

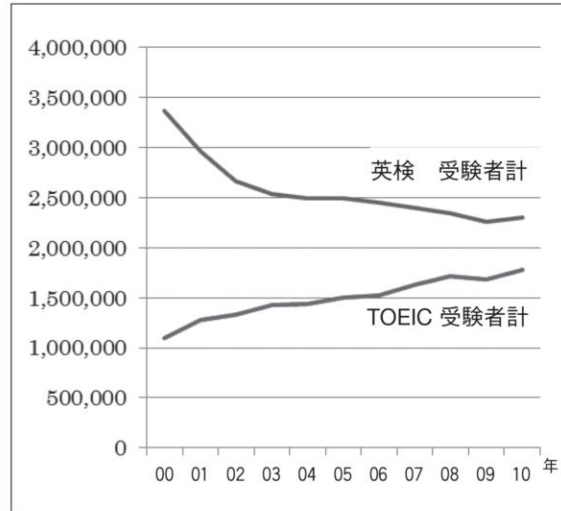
一方，2001年度に発表された「行政委託型公益法人」の改革による「国が認定している技能審査事業の認定制度」の廃止により，「社会教育上奨励すべきもの」として認定してきた技能検定制度を民間に委ねるといった，いわゆる「文部科学省認定」といった文言が外れたのも学校現場にはかなり大きな衝撃

を生んだ（日本英語検定協会, 2003b)。

図９，図10のように，やはり2000年度を境にその数は大きく下降していっていることがわかる。少子化の影響も否めないが，「文部科学省認定」が外れた影響が尾を引いているものと思われる。

▶ 図 9 ：英検受験者数（2000-2010）：級別（日本英語検定協会 , 2011f）

▶ 図10：英検受験者数（2000-2010）：総計（日本英語検定協会 , 2011f）

他方，TOEIC の受験者の推移は図11のようになっている。

元来 TOEFL も TOEIC もその「文部科学省認定」という認定は受けてはいなかった。さらに企業が求める TOEIC スコアの数値などというものは具体的な数値としては公表がなされてはいないが，TOEIC の高まりが示されたために，大学生やそれに相当する高専生の TOEIC 受験が必須となり，図11のように受験者数を伸ばしていったものと思われる。

だが，全国的にも英検の試験に関する知名度は揺らいではおらず，むしろ高校生に際しては，前述の山西（2000）の中で明らかにした，「ある一定の英検級（準２級・２級）を取得した生徒は，同様にセ

▶ 図11：英検・TOEIC 受験者数：総計比較（2000-2010）（日本英語検定協会 , 2011f; 国際ビジネスコミュニケーション協会 , 2011a）

ンター試験英語科目でも高得点を取ることができる」ということを生徒に訴えて，準２級取得者は，センター試験英語科目平均点およそ140点，２級取得者は平均点およそ160点が取れるということを訴えながら指導に努めていけば，英検が中等教育現場で果たす役割は大きくなるものと言える。

したがって，「文部科学省認定」などという言葉と「英検」の試験の地位や認知度とは全く関係がなく，むしろこれまでどおり高校や大学への合格基準の１つとして英検のある一定の級を取得している者には，表15にあるように，全国の（短期）大学・高等（専門）学校で，延べ1,228校（複数の学部による優遇を有する学校も含む）が合格の待遇（優遇）をしているという事実がある。

■ 表15：英検資格取得者優遇校（東京都・大学）一部抜粋（日本英語検定協会 , 2011e）

大学名	学部	入試区分	級
一橋大学	商	AO・推薦	準２級以上
上智大学	外国語・文・法・経済	AO・推薦	準１級以上
首都大学東京	都市教養（法学系）	推薦	２級以上
中央大学	法・商・経済	推薦	２級以上
専修大学	商	推薦	３級以上

このように，これまでの英検の資格取得といった努力が，入学試験時の優遇措置として功を奏するのであれば，努力に対する目標の設定にもつながって

いくものと考える。

他方，TOEIC でも表16のように，同様の優遇校は存在する。

■ 表16：TOEIC 目標得点取得者優遇校（東京都・大学）一部抜粋（国際ビジネスコミュニケーション協会，2011j）

大学名	学部	入試区分	目標得点
学習院大学	法	推薦	730 以上
上智大学	外国語（英語）	公募推薦	700 以上
首都大学東京	都市教養（法学系）	出願要件の一部	520 以上
中央大学	法	出願要件の一部	680 以上
専修大学	経営	推薦	500 以上

Bridge の優遇データは存在していないものの，TOEIC では全国の（短期）大学・高等（専門）学校で，延べ314校（複数の学部による優遇を有する学校も含む）が合格の待遇（優遇）をしているという実態は報告されている（国際ビジネスコミュニケーション協会，2003c）。しかしながらこの数は前記英検の1,228校と比較するとわずか26％にしか満たない。すなわち，高校や大学の合格基準の優遇条件として満たすには，これらの試験はまだまだハードルが高く，逆に言えば，高校生までの学生がある一定の点数を取得するというレベルまでは満たしてはいないということが言える。

一方で，センター試験には既に導入がされてはいるが，前述したように英検の一次試験にも若干 TOEIC 的なビジュアル方式の長文読解を導入するといった検討も，「国際コミュニケーション能力の伸長度測定」にも貢献しているといった姿勢を示すために必要である。加えて Written Test に対しての新たな対応策も大学入試問題自体も変革を遂げてきつつあるために，早いうちに講じつつ，その打開策を含めて PR をしていくことも必要であろうかと思われる。

6 中等教育学校現場の教員が欲している資料

学校現場の教員が「英検」から極めて大きな混乱を受けた出来事は，次の２点であった。

1.「文部科学省認定」が外された「英検」は今後どのような価値基準を示すのか

これをより率直に言えば，

2. これまでにせっかく「英検」を取っていても，「文部科学省認定」が外された現在ではその価値がなくなってしまうのではないか。また，今後取得したとしても，どこからも評価されないのではないか

と，いうことになるであろう。

これについての打開策としては，前述したように「文部科学省認定」などという言葉と「英検」の試験の地位や認知度とは全く関係がなく，むしろこれまでどおりの待遇（優遇）を受けているということを強調していくことが急務であろう。少子化の影響や TOEIC Bridge への移行うんぬん以前に，この風評の払拭こそが英検受験の受験者を増加させる最大の糸口になるであろう。

ただし，これも前述したように一次試験にも若干 TOEIC 的なビジュアル方式の長文読解を導入するといった検討（「国際コミュニケーション能力の伸長度測定」にも貢献しているといった姿勢を示すため）や，加えて Written Test に対しての新たな対応策（大学入試問題自体も変革を遂げてきつつあるため）なども早いうちに講じつつ，その打開策を含めて PR をしていくことも同時に必要であろうかと思われる。

一方，教員が「英検」について欲している資料は次の点である。

「英検」を取得しても，それがセンター試験の点数とどのようにつながるのであろうか

これまでにもまことしやかに「英検とセンター試験の点数には相関があるようである」と言われてきてはいたが，それを実証するデータが筆者の知る限りでは見当たらなかった。出題形式は一見して双方の問題を見比べてみると類似性はあるようにも思われるので，そこから「問題の出され方がある程度似ているのだから，点数だってたぶん同じように取れるだろう」といった漠然とした期待感しか持たれてはいなかった。そこで着目したのが前述の「英検取得級と大学入試センター試験英語科目の点数との相関関係」（山西，2000）であった。そしてそこで長年あいまいであった問題点を実証するに至ったのであるが，問題は果たしてこの論文が掲載されている本誌（STEP BULLETIN）が現場の先生方にどのくら

い読まれているかといった点である。

これまでにも著者が所属をしていた高等学校には最低1冊は送付されてきていたが，現場の教員は公務に追われ，また，本誌についてもさほど目を通す時間や，場合によっては意欲もさほどなく，加えて現場の授業実践からの視点では理解をするのにかなり難解な研究論文が数多く掲載されていたかと思われる。無論この冊子は学術論文ではなく執筆者もほぼ全員が中高の教師である（現在は大学院生や小学校教員も含まれている）のだが，その中において「英検が助成金を出してくれる研究」なのだから「英検」に還元する論文がふさわしいのではないか，と記した拙著ですら，国立・私立難関大学や医学部に進学する生徒が数多く在籍する著者が勤務していた学校の教員が目を通していた姿というのは皆無に等しい状態であった。ましてや全国的に鑑みても執筆者本人か英検の担当者が宣伝がてらこの論文集をPRしていなければ，その読者というのはごくわずかであったろうと推察される。以上の点から，当方が先に本誌に発表した論文は教員の「英検取得級と大学入試センター試験英語科目獲得得点との相関関係の是非」といった疑問に対して明確に答えを出すべく記されたものであるからには，その結果を数多くの高校現場の教員に知らしめて普及していっていただきたいと願う。そうすれば，単純に考えても「英検を高校在学時代に最低でも準2級，できれば2級を取得すれば，センター試験でもこのデータに準じる点数を取ることができるのだ。だから，君たちも今のうちに英語を頑張って勉強して英検（準）2級を取ろう」といった，身近な目標設定をなすことができ，それがゆくゆくは英検の受験を学校現場に普及させる大きな糸口になるのではないかと考える。

実例として，筆者自身，2002年度に勤務校における授業中で指導を行った際に，この事例を提示して生徒への英検取得を奨励した。結果は表17のとおりである。

表17の結果で理解できるように，最終的に全校生徒が1学年120名で6学年という少人数制の私立中高一貫校の中で，155名もの英検2級取得者を生んだ。内訳は，高校3年生で114名中55名，加えて高校2年生でも120名中55名，高校1年生では28名，中学3年生13名，中学2年生4名であった（高校1年生以上の取得率40%）。準1級に至っては高校3年生で3名（うち2名は高校2年段階で取得），高校2年生で3名，中学3年生で1名の計7名を輩出した。それまでには最高でも準1級取得者は2名であったにもかかわらず，この年度だけは格段の伸びを示した。この3名の高3生たちは，2002年度のセンター英語試験ではほぼデータどおりに190点以上を取得し（論文データでは180点以上は取得可能），2名が国立大学医学部，1名はTOEFLも580点台を獲得して米国大学国際関係学部にそれぞれ進学していった。準2級取得者は高校3年生で104名，高校2年生でも104名，高校1年生で107名，中学3年生70名，中学2年生33名，中学1年生4名の計422名

■ 表17：英検の級取得者数（2003）（北嶺中高等学校，2003）

英検 2 級取得者　155名
・高校3年生：55名（114名中） ・高校2年生：55名（120名中） ・高校1年生：28名 ・中学3年生：13名 ・中学2年生： 4 名 （高校1年生以上の取得率40%）
準 1 級取得者　7名
・高校3年生：3名（114名中） ・高校2年生：3名（120名中） ・中学3年生：1名
準 2 級取得者　422名
・高校3年生：104名（114名中） ・高校2年生：104名（120名中） ・高校1年生：107名 ・中学3年生：70名 ・中学2年生：33名 ・中学1年生： 4 名 （中学 3 年生以上の取得率82%）

■ 表18　センター試験英語獲得点者数と進学先（北嶺中高等学校，2003）

準 1 級取得者　192.5点以上（論文データ：180点以上取得可能）
国立大学医学部　2名 米国大学国際関係学部　1名 （TOEFL-PBT 580点台獲得）
2 級取得者　160.1点（論文データ：160点前後取得可能）
東京・京都大学　3名 北海道大学　6名 国立大学医学部　4名 その他難関国立大学　7名
早稲田大学・慶應義塾大学・ICU他難関私大・医大 21名

であった（中学３年生以上の取得率82％）（北嶺中高等学校, 2003）。

以上のことから，こういった論文情報は必ずや英語学習者には言うに及ばず，指導者に対しても有益な情報になることと確信する。その他，本誌は近年一種の学術的な論文が数多く見受けられるものの，学校現場に即した実践的な研究により，上記のように現場の教員に有益な情報が提供できるものと考えることから，そのような掲載も数多くなされることが望まれる。

7 保護者に対して有益性を訴える資料

５章で記した提言と実例は，教育者のみならず受験料を管理する保護者にとっても有益な内容，および資料になることと確信する。しかしながら，教育者・保護者ともにそのまま論文を提示されても必ずしもすぐに必要となるべき箇所ばかりではないかとも推察するので，必要かつすぐに取り入れられる部分のみを要約・編集し，グラフや表もともに提示して，簡潔かつ的を射たイラストなども含めた小冊子などで配布できるとその効果はさらに増すものと思われる。英検受験者数の復活を望む際にはぜひともこの提案を早急に実行していただけることを切望する。これまでに記してきた内容（TOEIC Bridge 他，各種英語資格試験に対する英検の有意性）も併せて要約・編集をした形で，英語検定試験を PR していくとより一層の効力が増すものと思われる。

8 その他に対する意見・提言

試験を受ける際に，やはりその後のフィードバック（受験者への支援・サービス）は不可欠であろうと思われる。現在ではシール状になった形で「英検取得」を示す札が合格証書とともに添付されており，これは新たに取得証明書を発行してもらう上で大変有用な方法である。加えてインターネットによる応募は，現代のコンピュータ社会において大変簡潔で快適な手続き方法であるとも思われる。反面，合格証書そのものがあまりに機械的に印刷されており，それが５級であろうと準１級であろうと印刷面の色や内容が同一であるために，非常に無味乾燥で味気ない印象を受ける。やはり高い級を取得するにつれて合格証書の大きさを徐々に大きくするなり，もしくはせめて色合いだけでも変化させて重みのある証書にするなりといった工夫が欲しい。

英検の模擬試験的位置づけにもなる EVIDUS 主催のインターネット上での試験 CASEC（Computerized Assessment System for English Communication）について，受験金額の高額さが学校現場では問題になっている。１回3,500円となっているが，「認定校」とされているそのほとんどがパソコン教室や学習塾関連であり（CASEC, 2003），せっかく良いものであっても利潤追求のあまり高額商品になってしまっては，学校での団体受験や個人受験をする際にも二の足を踏んでしまい，結局はその効果が生かされなくなってしまうという懸念もある。

また，団体でもらう賞についても選考基準を明確にすべきであろう。中学・高校段階で英検準２級，２級，準１級を取得するにはかなりの努力が必要である反面，受験者数から割り出した合格者数のみで算出されているとすると，極論すればその学校から20名を受験させて，例えば学年の学習進度状況に見合わない低い級であっても（例：高校３年生で英検３級取得など）合格すれば「合格率」は100％と見なされて表彰を受けるといった，一見解せない状況も生まれている。（例：ある地域における私立 A 高校は英検２級取得者を５人輩出し,「取得率が高かった」ということ（５人受験で５人合格か）で「英検団体優良賞」を授与された。学校案内でそのことを大いに PR し，生徒募集の宣伝として用いられた）。

しかしながら，団体受験者数が多い学校ということは，それだけ１度や２度落ちてもかまわないから自分のめざす級を果敢に受験するといった，挑戦心が旺盛である生徒が多いと考えることができる。そのような学校に対しても日の目を見ることができるような，公平な賞の扱い方を望みたい。とりわけこういった賞はやはり学校にとっても大変名誉なことであり，ひいてはそれが学校をより良くしていくための宣伝効果にもつながるといった，教育的かつ学校経営的効果を生み出すことにもなるからである。

次に2004年度から英検の一次試験筆記において，「英作文」の出題で１級と準１級に限り従来の記し方のテーマを絞った形式，および語順並び替えから，図12，図13のような形式に変更になった。

旧

FROM: Michael Goff (michaelgoff@step.test)
TO: Travelways (travel@travelways.agency)
DATE: June 15, 2003
SUBJECT: RE: Reservation

Dear Travelways:
1. 先週ホテルの予約を入れた者であるが，その件について問い合わせがある。予約番号は3457である。
2. 他の代理店では同じホテルの宿泊費を，1泊わずか150ドルで提供していることを知った。
3. 2泊分だと，100ドル近くも違ってくる。
4. 同様の価格にしてもらうことは可能か。
5. いつも御社のサービスには満足し，信頼もしているので，できればこのまま予約をお願いしたいと思っている。
6. 無理であれば，他社を手配するので，できるだけ早く知らせてほしい。
7. 明日は事務所にいないので，下に携帯電話の番号を書いておく。

Best regards,
Michael Goff

新

■ Write an essay on the given TOPIC covering at least three of the POINTS below.
Use the space provided on your answer sheet.
■ Structure: three or more paragraphs, including an introduction and conclusion
■ Length: around 200 words

TOPIC
The Advantages and/or Disadvantages of Studying Abroad
POINTS
・Homesickness・Career prospects
・Independence・Language barrier
・International understanding・Culture shock

▶ **図12：英検1級一次試験問題　新旧対照表（日本英語検定協会, 2004）**

旧

The history of the world's indigenous peoples is one of loss — the past few centuries of colonization have destroyed their civilizations. Many groups have disappeared, and those that have survived often find themselves (31) conquerors. Now that is starting to change. Indigenous peoples are making important strides in regaining the land, languages, rights, and respect they have lost in the past 500 years. In fact, now that developed countries are becoming increasingly concerned with the environment, some indigenous groups are held up (32) nature.

(31) 1 their　2 a social order
3 bottom of　4 dominated by
5 at the

(32) 1 in harmony with　2 can live
3 mankind　4 as examples
5 of how

新

■ Read the letter below.
■ Imagine that you are Hiroki, and write an appropriate response to Linda in the space provided on your answer sheet.
■ Your letter should be around 100 words in length.

Dear Hiroki,
I hope this message finds you well. The reason I'm writing is to ask you some questions. I have to write a report about changes in the Japanese diet. In your experience, how do the eating habits of you and your friends differ from your parents' generation? What do you think is causing those changes? How do you feel about them?
Please write back as soon as you can.
Your friend,
Linda

▶ **図13：英検準1級一次試験問題　新旧対照表（日本英語検定協会, 2004）**

これによって，英検のWriting能力を測る形式もよりGTECに近くなり，一層オーセンティックで実践的な形に変わっていったということができる。英検自体の出題形式が，国立大学入試二次試験Writingの形式により近づいていった。ただし，現段階では1級，準1級に限られていることから，今後2級以下にもこのようなことが続いていけば，中等教育現場，とりわけ後期中等現場にあたる高等学校においては，高校生の履修内容にふさわしいWriting力を測定することができていけることから，英検の採択状況はより改善され，ひいてはReading, ListeningとWritingの3技能までは測定していくこ

とができるものと考えられる。

以上のことから，これまでさまざまな英語資格試験の中等教育現場における優位性，および課題についての提言を行ってきた。課題に対するこれらの点が改善されていけば，とりわけ「英検」は他の資格試験と比較して，その伝統と実績から，中等教育現場においてはますますその効果を発揮するものと思われる。

9 総括：課題と提言

上記の章より，最終的に全体を通しての総括として，今後の資格試験全般に対する課題と提言を列挙する。これにより読者諸氏，および英検においては，さまざまな活用をお願いしたい。

(1) TOEIC：

① 企業による「英語コミュニケーションの能力を図る」ことの推奨による，受験者数（とりわけ高専・大学・企業）の増加を図るべきである。

②「Speaking and Writing Tests（略称SW テスト）」のより一層の開発―4技能の充実―を図るべきである。

【課題】中高生受験者総数の低迷

(2) TOEIC Bridge：TOEIC よりも「易しくて」，「日常的で身近な」，「時間の短い」，「初級学習者向けのテスト」としての確立をすべきである。

―大学・企業が求める資格試験の英語数値＝「TOEIC スコア」による，高等学校分の数値の追加も図るべきである。

【課題】

① 使用単語の制限なし

② 公立中学校現場での学習語彙数：1,200語―語彙レベルの不適合

③ 測定範囲：「初級から中級レベル」というあいまいさ

④「センター試験英語」問題との内容の整合性の弱さ

(3) 工業英検：工業英語の重要性を広く普及・啓発し，その実力を客観的に正しく評価することを目的（工業高校生・高専生対象）としていくべきである。

【課題】

① 中学生での学習領域をはるかに越える語彙が出題（4級でも）

② 文脈の背景にある「工業系の知識の内容が周知か」どうかで解答の出来が左右される

③ 工業高校生の履修レベルを上回っている

高専での採用率も決して高くはない―高専では TOEIC に傾倒

(4) 英検：

① 学年履修レベルや語彙レベルが提示されているが，受験生も準備しやすい工夫をよりしていくべきである。

②「Can-do リスト」―「英検合格者の実際の英語使用に対する自信の度合い」という副題による，「何かができるようになった人は，テストで何点取れる」という指標をさらに確立していくべきである。

③「4技能」を一次試験（Reading, Listening, Writing）と二次試験（Speaking）により，さらに測定していくべきである。

④「英検2級」と「センター試験（2002年度）」との出題形式の類似性による，「センター試験」事前準備用としての「2級」の活用が可能である。

⑤「準2級取得者は約140点，2級取得者は約160点がセンター試験英語科目」で取得可能という情報を普及していくべきである。

【課題】

① Skimming, Scanning を用いての情報収集という「現代的な内容読解」の不足

② 真の「書く」能力（Writing Competence）測定の欠如

③「準1級」の社会的な位置づけ：「英検2級取得者」（＝ TOEIC 450点取得者に相当か）の，次の学習指針としての「TOEIC 受験」の高まり

【提言】

① 本論文，および「英検取得級と大学入試センター試験英語科目との相関関係に関する研究（山西, 2000）」の，中学・高等学校現場への情報普及・宣伝拡大をしていくべきである。

―「センター試験英語」得点獲得のための足掛かり

② 全国の（短期）大学・高等（専門）学校での「合格待遇（優遇）」の普及・拡大をするべきである。

③ 英検の一次試験における「TOEIC 的なビジュアル方式長文読解」の導入をするべきである。
—「センター試験英語」は既に導入済み：「国際コミュニケーション能力の伸長度測定」

④「中等教育現場の教員が必要としている資料」の提供

1)「『英検』を取得しても，それがセンター試験の点数とどのようにつながるのであろうか」に対する情報提供を大いにするべきである。
—【提言】①の全国普及宣伝活動実施

2)「STEP BULLETIN」（英検研究助成）における「学校現場に即した実践的な研究」の積極的採用促進と，現場の教員が冊子に目を通すような工夫をするべきである。

3)「合格証書」の「見栄え」による工夫をするべきである。
—画一化の廃止と,「高い級取得」＝「合格（証書）の重み」としての工夫：色合い・証書の大きさの変化など

4) 団体賞などの選考基準を明確にすべきである。
—「受験者数・合格者数・合格率」その他

⑤ 保護者に対して有益性を訴える資料の提供
— 必要かつすぐに取り入れられる部分のみを要約・編集し，グラフや表も提示しながらの，簡潔かつ的を射たイラストなども含めた小冊子などの配布・宣伝活動をするべきである。

以上に関して課題を提起し，提案をする。

謝　辞

本研究を，このような形で英語関係者の方々にご提供する機会を与えてくださった（財）日本英語検定協会と選考委員の皆様に，厚く御礼を申し上げます。また，とりわけ小池生夫先生におかれましては，2000年度の研究助成の際も含めて２度にわたり，大変詳細なるご示唆とご助言を与えてくださいましたことに，心より感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

参考文献（＊は引用文献）

＊Benesse Cooperation.（2002).「Writing 第 5 回英語コミュニケーション能力テスト」, pp.26-27. 東京：School Benesse.

＊CASEC.（2003). 英語コミュニケーション能力判定テスト. http://casec.evidus.com/index.html

＊栄光学園 .（2004).「卒業後の進路　2003 年度大学合格者数（2003.5.9 判明分）」. 学校案内 HP. http://www.eiko.ed.jp/index-j.html（2004 年 10 月 アクセス）

＊藤井章徳 .（1997).「本校における『英検』活用について」.「英検 & 入試情報」. p.17. 東京：（財）日本英語検定協会 .

＊藤原宏之 .（1997).「センター試験と英検 2 級の類似性」. *The Eiken Times*. 4 月臨時増刊号, p.10.

＊福岡女学院 .（2004).「文科省が推進する『英語が使える日本人』の育成のための行動計画・スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール（SELHi）事業とは」.「SELHi について」. 福岡女学院学校案内 HP. http://www.fukujo.ac.jp/js_new/01SELHi/selhi_main.html（2004 年 10 月アクセス）

＊北海道大学 .（2002). 入学試験問題 . 北海道：北海道大学 .

＊北嶺中高等学校 .（2003).「英語検定試験取得者数一覧　平成 15 年 3 月現在」.「2004 HOKUREI INFORMATION 北嶺―めざすなら高い嶺」, p.17. 北海道：北嶺中高等学校 .

＊石田雅近他 .（2002).「2. 英語力に関して　1）英語能力試験を受けたことがあるか？　その結果は？」.「第 3 章 英語力と自己英語研修 全国現職英語教員アンケート調査結果」, p.20. 東京：英語教員研修研究会 .

＊JABEE.（2012).「4. 技術者教育プログラムの審査項目」.「日本技術者教育認定制度とは」. http://www.jabee.org/OpenHomePage/q&a0204-0509.htm#4

＊金谷憲 .（2002).「TOEIC Bridge の効果的な活用方法と今後に期待するもの」. *TOEIC Bridge Newsletter, 1*, p.10.

＊くもん出版 .（1997). *Capable.*

＊国際ビジネスコミュニケーション協会 .（2002).「技術者教育の場・高専における TOEIC の活用」.「大学から高校へと広がる TOEIC と TOEIC Bridge の活用」. TOEIC SEMINAR 第 91 回 TOEIC & TOEIC Bridge 研究会, p.11. 東京：（財）国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会 .

＊国際ビジネスコミュニケーション協会 .（2003a).「栄光学園中学高等学校 TOEIC Bridge と TOEIC を併用。学習の成果をテストで把握」. 活用事例 . 中学・高校 TOEIC Bridge. 東京：（財）国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会 .

＊国際ビジネスコミュニケーション協会 .（2003b).「栄東高等学校　1 年生全員にテスト実施。今後の英語教育の指針に活用」. 活用事例 . 中学・高校 TOEIC Bridge. 東京：（財）国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会 .

＊国際ビジネスコミュニケーション協会 .（2003c).「受験者データレポート　Data　File」, *TOEIC Bridge Newsletter, 3*, April 2003, p.5.

＊国際ビジネスコミュニケーション協会 .（2003d).「聖光学院中・高等学校　中学 2 年と 3 年生全員に実施。学年ごとの能力比較に活用」. 活用事例 . 中学・高校 TOEIC Bridge. 東京：（財）国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会 .

国際ビジネスコミュニケーション協会 .（2003e).「Ⅴ-1 所属学校別受験者数と平均スコア」. TOEIC テスト 2002 DATA & ANALYSIS, p.7. 東京：（財）国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会 .

国際ビジネスコミュニケーション協会 .（2003f).「Ⅴ-4 実用英語技能検定（英検）取得級別受験者数と平均スコア」. TOEIC テスト 2002 DATA & ANALYSIS, p.7. 東京：（財）国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会 .

＊国際ビジネスコミュニケーション協会 .（2011a).「Ⅰ TOEIC テスト受験者数推移」. TOEIC テスト 2011 DATA & ANALYSIS, p.1. http://www.toeic.or.jp/toeic/pdf/data/DAA2010.pdf

＊国際ビジネスコミュニケーション協会 .（2011b).「Ⅳ-7 過去 5 年間の新入社員受験者数推移と平均スコア（2006 年度～ 2010 年度）」. TOEIC テスト 2010 DATA & ANALYSIS, p.6. 東京：（財）国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会 .

国際ビジネスコミュニケーション協会 .（2011c).「Ⅴ- 1 所属学校別受験者数と平均スコア」. TOEIC テスト 2010 DATA & ANALYSIS, p.8. http://www.toeic.or.jp/toeic/pdf/data/DAA2010.pdf

＊国際ビジネスコミュニケーション協会 .（2011d).「Ⅵ PROFICIENCY SCALE」. TOEIC テスト 2011 DATA & ANALYSIS, p.13. 東京：（財）国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会 .

国際ビジネスコミュニケーション協会 .（2011e).「Ⅴ-1 所属学校別受験者数（2010 年度）」. TOEIC スピーキングテスト／ライティングテスト 2010 DATA & ANALYSIS, p.7. 東京：（財）国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会 .

＊国際ビジネスコミュニケーション協会 .（2011f).「TOEIC テストとは」. http://www.toeic.or.jp/toeic/about/what/

国際ビジネスコミュニケーション協会 .（2011g). TOEIC Sample Tests.

国際ビジネスコミュニケーション協会 .（2011h).「テスト問題の構成」.「テスト構成について」. http://www.toeic.or.jp/bridge/about/tests/

＊国際ビジネスコミュニケーション協会 .（2011i).「開発の背景」.「TOEIC Bridge とは」. http://www.toeic.or.jp/bridge/about/what/

＊国際ビジネスコミュニケーション協会 .（2011j).「入学試験・単位認定における活用状況」. http://www.toeic.or.jp/school/school_sort.php

＊国際ビジネスコミュニケーション協会 .（2011k).「TOEIC Bridge 受験者数の推移」. http://www.toeic.

or.jp/bridge/pdf/data/transition2001_2011.pdf
＊国際ビジネスコミュニケーション協会.(2011l).「TOEIC Bridge と TOEIC テストのスコア比較表」.『TOEIC Bridge DATA & ANALYSIS 2010』.
＊国際ビジネスコミュニケーション協会.(2011m).「TOEIC Bridge と TOEIC テストの比較」. http://www.toeic.or.jp/bridge/about/compare/
＊国際ビジネスコミュニケーション協会.(2012).「TOEIC スピーキングテスト／ライティングテストについて」. http://www.toeic.or.jp/sw/about/
＊文部科学省.(2004).「企業が新卒採用で求める英語力・企業での英語の必要性と人材の育成」.「英語が使える日本人」の育成のためのフォーラム2004―前進する日本の英語教育―分科会Ⅰ. 東京：東京ビッグサイト.
＊日本英語検定協会.(2003a).「2002年度 英検受験状況」.『英検ガイド2003』, p.13. 東京：（財）日本英語検定協会.
＊日本英語検定協会.(2003b).「英検は今後も実施され，その価値も変わりません―『認定制度廃止』について」.『英検ガイド2003』, p.20. 東京：（財）日本英語検定協会.
＊日本英語検定協会.(2004).「一次試験 英作文一次・二次試験改定のポイント」. p.4. 東京：（財）日本英語検定協会.
＊日本英語検定協会.(2011a).「出題の基本方針と評価」.『英検ガイド2011』, pp.3-5. 東京：（財）日本英語検定協会.
＊日本英語検定協会.(2011b).「英検の沿革」.『英検ガイド2011』, p.18. 東京：（財）日本英語検定協会.
＊日本英語検定協会.(2011c).「審査基準と試験内容」.『英検ガイド2011』, p.7. 東京：（財）日本英語検定協会.
＊日本英語検定協会.(2011d).「英検 Can-do リストとは」.『英検 Can-do リスト』. 日本英語検定協会HP. http://www.eiken.or.jp/about/cando/cando.html(2011年9月21日アクセス)
＊日本英語検定協会.(2011e).『英検資格取得者優遇校』. 日本英語検定協会HP. https://uketuke.eiken.or.jp/loginservice/jsp/L1F002.action;jsessionid=93F8E7F4C197676C5E041EAA0A60CCE4
＊日本英語検定協会.(2011).「2011年度・受験の状況」. http://www.eiken.or.jp/situation/index.html
＊日本工業英語協会.(2011a).「工業英語検定試験サンプル問題」. 日本工業英語協会 HP. http://jstc.jp/koeiken/bassui.html
＊日本工業英語協会.(2011b).「工業英語とは？」. 日本工業英語協会 HP. http://jstc.jp/koeiken/koeiken.html (2011年9月21日アクセス)
＊聖光学院中学校・高等学校.(2004).「大学合格者数」. 学校案内HP. http://www.seiko.ac.jp/index.html
The Chauncey Group International.(2011).「TOEIC Bridge サンプルテスト」. http://www.toeic.or.jp/bridge/about/tests/sample01.html
＊TOEFL.(2003). *TOEFL TWE Writing Topics*. ftp://ftp.ets.org/pub/toefl/989563wt.pdf
＊東京大学.(1999).「英語コミュニケーション能力テストと TOEIC との相関関係」.
＊東京大学.(2000). 入学試験問題. 東京：東京大学.
＊山西敏博.(2000).「英検取得級と大学入試センター試験英語科目の点数との相関関係」. *STEP BULLETIN, vol.13*, 26-42.
＊山西敏博.(2003a).「英検 2 級とセンター試験英語科目との出題比較」. 未発表論文.
山西敏博.(2003b).「第 2 問　センター模擬試験　第 1 回」. 私作品.
山西敏博.(2003c).「第 3 問　センター模擬試験　第 1 回」. 私作品.
山西敏博.(2003d).「『和文英訳』オリジナルサンプル試験」. 私作品.
＊山西敏博.(2004).「TOEIC Bridge とセンター試験英語科目との出題比較」. 未発表論文.
＊山西敏博.(2010a).「英検 2 級とセンター試験英語科目との出題比較」. 未発表論文.
＊山西敏博.(2010b).「TOEIC Bridge とセンター試験英語科目との出題比較」. 未発表論文.